

現代日本のイラストレーション・絵本の諸傾向の歴史的検証と、先端の実践

雑誌「ローズプラスエクス」発刊

A HISTORICAL INVESTIGATION OF TENDENCIES IN MODERN JAPANESE ILLUSTRATION AND PICTURE-BOOKS, AND ITS AVANT-GARDE PRACTISE The Launch of the Magazine *Rose Plus X*

寺門 孝之 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
戸田 ツトム デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
赤崎 正一 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
三好 卓 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 実習助手
しりあがり 寿 先端芸術学部まんが表現学科 教授

Takayuki TERAKADO Department of Visual Design, School of Design, Professor
Tztom TODA Department of Visual Design, School of Design, Professor
Shoichi AKAZAKI Department of Visual Design, School of Design, Professor
Taku MIYOSHI Department of Visual Design, School of Design, Assistant
Kotobuki SHIRIAGARI Department of Manga Media, School of Progressive Arts, Professor

要旨

現代日本におけるイラストレーション及び絵本の分野の隆盛の直接的な端緒は、戦後復興期において「デザイン」の分野から職業的なイラストレーターが専門化し、またその後イラストレーターが積極的に絵本制作に関るようになったことにあると思われるが、さらにその基盤を遡って検証するには浮世絵をはじめとする江戸期の大衆文化やそれ以前へと視線を向けて行く必要がある。本共同研究ではそうした視点に意識的である学内・学外のイラストレーター、グラフィックデザイナー、編集者、作家その他の連携により、調査・資料収集・考察・作品制作を進め、我々にとってもいまだなお、描くことと書くことが互いに内包しあう行為でありつづける、絵と文字の理想的な相互関係を探り出し、今現在イラストレーションとデザインがどのように結び合うことができるか、実践をもって研究したいと考えた。

その過程・成果については、広く読者に開かれた記事、及び作品として編集され、雑誌として出版・流通されることが望ましいと考え、「ローズプラスエクス」1号・2号として編集・発刊することができた。執筆者を中心としたトークイベントも2回にわたり開催され、好評を博すこととなった。以後次年度にひきつづき研究を進め、雑誌を継続していく考えである。

Summary

It is thought that the direct origin of the flourishing of the field of modern Japanese illustration and picture-books lies in the specialisation of professional illustrators from the field of design, and then later the active production of picture-books by these illustrators. However, if we wish to go further back in time and ascertain the basis of this, it is necessary to turn our attention to the popular culture of the Edo period, as exemplified by *ukiyo*e prints, and the time before that. In this joint research, we shall undertake surveys, collection of materials, studies, and production of works, in collaboration with illustrators, graphic designers, editors, writers etc, who are aware of the point of view mentioned above. We wish to investigate the ideal relationship between pictures and writing. For the process and achievement of this, it was thought desirable to edit together articles and works open to a wide readership, and to publish and distribute this as a magazine, and to this aim the first and second editions of *Rose Plus X* have been edited and published. Two discussion events featuring the magazine's writers have been held, and these have been favourably received. It is hoped that we can continue this research and the production of this magazine in the next academic year.

1) 前提・目的

筆者の担当する課目「イラストレーション史」の授業では毎回、冒頭に特定の課題モチーフを掲げ受講者に数分の時間でイラストレーションを描いてもらっている。例えば課題は「天使」「妖精」「妖怪」「美しい目」などである。毎回 100 名前後の受講者により描かれるイラストレーション群は、もちろん描き手個人個人の経験や知識及び描き方の個性を反映し多様な表現が見られるのであるが、それでもいくつかのタイプが判別されることが多い。それには社会的に共有される先行するイメージ、描法の存在が想定される。今現在、ある特定の個人があるモチーフを描こうとする際に、個人の個性を超えてその絵を限定するのは、過去に描かれ様々なメディアを通して再生産される既成のイメージであると思われる。

本共同研究は、現在日本において隆盛を極めるイラストレーションや絵本の多彩な表現の歴史的な基盤を探りつつ、同時にその最先端である我々の時代の表現の可能性を実践しようと構想された。

2) 成果

本共同研究では、その成果について一般書店に流通される雑誌の形態を取り広く社会へ開示し、またその反響から新たな研究素材を得たいと当初から構想してきた。

その結果、雑誌「ローズプラスエクス」が創刊され、1号（図1）・2号（図2）が左右社から刊行されることとなった。

雑誌タイトルの「ローズ」は不変の生命力、不死や再生の象徴として扱われてきた「薔薇」に、イラストレーションやデザインの力をシンボライズさせたく付した。また「プラスエクス」は「+」と「×」を合わせると漢字の「米」に似た記号と成り、子供の絵やミロの絵画に現れる簡易な光の表現となる。例えば現在使用される漢字の「気」の「×」は、かつては「米」であった。現在の日本でのイラストレーションや絵本、デザインその他様々な分野の中で、この「×」から「米」へと遡るような視線・視点をこの雑誌の基点としたいと考え、このような命名をした次第である。

特集テーマを1号では「美しい目」（図2）、2号では

「幼な心」とした。（図3）



図1) ローズプラスエクス 1号 表1



図2) ローズプラスエクス 1号 特集扉画：寺門孝之

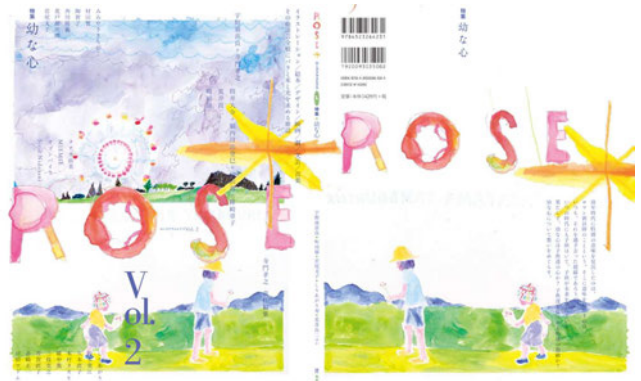


図3) ローズプラスエクス2号 表1 表2

近世から近現代にかけての礼儀作法、化粧文化について専門に研究している陶智子氏（金沢学院大学大学院教授）は、「美しい目についての考察」と題し連載を担当し、現在広く一般的に描かれるイラストレーションにおける目の表現が、江戸期の浮世絵でのそれと大きく異なることを揚げ、その要因を江戸期の化粧法を伝える多数の書物に探ろうとする。江戸期では目が大きく見えることはむしろマイナスイメージであり、細く涼しげな目が理想とされたことを明らかにし、美人画において睫毛の表現が成されていないことなど、興味深い指摘と分析を繰り広げている。



図4) vol.2 p76/77 陶智子氏見開き

また、研究分担者の赤崎正一氏は歌舞伎を題材とした連載において、建替えのため昨年閉館された歌舞伎座の建築物としての歴史性に触れ、その外面的な意匠が歌舞伎そのものとは何等の交渉を持たない当時の政治的な要請による「伝統の身振りをした飾り」でしかなく、一方、現代を生きる若い役者の身体には近代をやすやすと跳び越えて歌舞伎の真髓が今ここに伝承されていることを、明朗に書き出した。



図5) vol.2 p32/33 赤崎正一氏見開き

その外、荒井良二氏による本学アートアンドデザイン特別講義の全編掲載、宇野亜喜良氏のギャラリートークの記録、若尾文子氏による初講演の記録、町田康氏の未発表小説連載、荒戸源次郎氏による映画エッセイなど現在の各分野を代表する著名人による連載に加えて、本学の学部生、大学院留学生の野心的な作品も併せて掲載し、研究分担者である戸田ツトム氏のアートディレクションのもと、現在の多彩な表現が提起する様々な問題を立体的に視覚化する誌面構成が試みられている。

3) 発展

1号、2号の発刊を記念するトークイベントが、書店、及びブックカフェの主催として開催され、多数の入場者を得て刺激的な議論が交わされた。



図6) vol.1 イベント

1号の発刊記念イベントは2010年11月29日 19:00～20:30 Book1st 新宿店において、研究分担者である赤崎正一氏、戸田ツトム氏と筆者の出演で開催された。エディトリアルデザインを専門とする赤崎氏、戸田氏が揃ったことから、話題の中心は雑誌をめぐるものとなった。数々の雑誌を立ち上げてきた戸田氏の「雑誌を創る、ということは人に迷惑をかけること」という発言が印象に残った。

2号の発刊は、2011年3月11日の大震災の影響を受けて大幅に遅れ、発刊記念イベントは2011年7月24日 15:00～17:00 原宿のビブリオテックの地下ホールにおいて、荒井良二氏、研究分担者であるしりあがり寿氏と筆

者の出演で開催された。

図7) vol.2 イベント フライヤー

図8) vol.2 イベント ポスター

出演者それぞれにとって、3月11日及びそれ以降の日々がどのように影響し、またどのように過ごしているのかについて、具体的に語り合う極めて真剣で、ある意味深刻なテーマでのトークとなったが、会場は常に笑いで溢れ、最終的には会場をぐるりとほりめぐらした白紙に参加者全員で絵を描くという大団円のうちに朗らかに終了した。絵

の力を再確認できたイベントとなった。その内容については次号「ローズプラスエクス」に掲載を予定している。



図9) 参加者からの「かゆい、を描いてみて欲しい」という要望に立ち尽くす3人。

4) まとめ

現在、日本のイラストレーション・絵本の分野での専門誌は極めて限られ、現在の作家紹介やニュース、公募に内容も限定されている。イラストレーションやデザインという言葉が用いられる以前の状況から現在まで通底する問題を吟味・研究する先行例は極めて乏しい。既存の「イラストレーション史」なるものは未だ存在せず、現状に対する批評の場も無いに等しい。興味深い題材は手付かずのまま満載されていると認識される。本共同研究を通して、真新しいイラストレーション史を構築し得る可能性の端緒を捉え得たのではないか。江戸期の浮世絵が単純に視覚芸術に限定できないように、現代日本のイラストレーション・絵本についても多様なアプローチが必要で、今後さらに研究者のネットワークを強化しつつ、このテーマに取り組みつづけたらと思う。

他の共同研究分担者

- ・廣中 薫 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 准教授
- ・久本 直子 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 助教
- ・山本 忠宏 先端芸術学部まんが表現学科 助教